

第16回国際日本文学研究集会記録（1992）

（敬称略）

1991年11月 8 日 委員会

計画立案、招待者・シンポジウムテーマ等検討

1991年12月26日 委員会

招待者決定、シンポジウムテーマ決定、プログラム検討

1992年 6 月18日 館内打ち合せ会議

招待者連絡事項・補助金取扱い等の検討

1992年 8 月11日 委員会

研究発表応募者審査、プログラム決定

1992年10月 1 日 館内打ち合せ会議

招待者受入れ体制確認、補助金取扱い等の確認

1992年11月12日 委員会

プログラム、進行の細部確認

1992年11月12日 集会第一日

開会挨拶 小山弘志

研究発表 崔京国 Emmanuel LOZERAND 劉岸偉

座長 山下宏明

研究発表 谷口巖 湯沼誠二 栗田香子

座長 芳賀徹

1992年11月13日 集会第二日

研究発表 中川成美 呉皇禪 Amy CHRISTIANSEN

座長 桑川光樹

シンポジウム 鹿野政直 John Whittier TREAT

亀井秀雄 Jean-Jacques ORIGAS

尹相仁 William Jefferson TYLER

Irmela 日地谷 KIRSCHNEREIT

平岡敏夫

レセプション

1992年11月14日 集会第三日

ラウンド・テーブル*

公開講演 Wolfgang SCHAMONI

Mikołaj MELANOWICZ

閉会の辞 福田秀一

研究集会参加人数 139名（うち外国人研究者59名）

***ラウンド・テーブル要旨**

1992年11月14日（土）、午前10時30分より正午まで、国文学研究資料館中会議室にて、「各国における日本文学研究の現状」というテーマで、ラウンド・テーブルが開催された。外国からは9名、日本からは10名の研究者が参加した。各国の研究者より、各国における日本文学研究の現状と方向性、及び問題点についての最も新しい情報がもたらされるとともに、参加者の間で、日本文学研究のあり方について活発に意見が取り交わされた。

ラウンド・テーブルは、国際日本文学研究集会では、初めての試みであったが、従来の日本と外国の学術交流の議論の枠組みを越える、日本文学の研究のあり方に関する本質的な議論がなされた。

今回のラウンド・テーブルを通じて、各国の日本文学研究の現状について、以下のような問題点が浮き彫りにされた。

第一に、いずれの国においても、日本及び日本文学に対して極めて高い関心を持たれている反面、その関心の高さが、“経済大国日本”に対するものであって、必ずしも外国の日本文学研究者の問題意識と一致するものでない現状が指

摘された。各国において日本語学習者が急激に増加しているとともに、日本文学の翻訳も今までにない活況を見せている。ところが、いまだに、日本文学の中でも文学研究を選択することが大きな決断を要するものであったり、社会科学系の日本文学研究者が増加しているのに対して、文学研究者が減少さえしたりしている。日本及び日本文学への関心の高さが日本文学研究の成果に直ちに結実するのではなく、また日本文学研究者も、社会の日本に対する社会的経済的関心に自ずと応えて行かざるを得ぬという困難な状況にあるのである。日本に対する関心の高さが、必ずしも手放して喜び得る事態とは言い難いことが報告された。

第二に、外国人による日本文学研究の業績が、各国において学問的に、あるいは社会的に、どのように還元し得るのかという問題が提起された。この問いは、究極的には、外国人研究者にとって、日本文学研究とはいかなる意味を持つのかという問いかけになってこよう。従来の外国人による日本文学研究には、ともすれば、日本文学を西洋の文学理論を立証する材料とする傾向や、あるいは逆に、日本人による日本文学の研究方法に追随することをよしとする傾向が見られがちであった。そうではなく、各国における文学研究・文学理論と対等に渡り合え、相互に刺激しあえるような日本文学研究、また、各国のそれぞれの立場から新しい視点によって日本文学を対象化し得るような日本文学研究が今必要とされていることが主張された。この問題は、日本の研究者の側にもはねかえってくるものであって、日本文学にふさわしい文学理論（西洋の文学理論の応用でなく）を日本人自身の手で生み出すことが困難な状況への反省、文献実証主義的な日本の文学研究方法の対象化の必要性や、文学全体を論じ合えるような場の必要性についての発言が、日本人参加者よりなされた。

第三に、日本文学の研究のあり方に関して、日本文学総体を視野に入れることと、より専門的に限定された対象に取り組むこととの調和が、外国人研究者においては、容易ではないことが指摘された。特に、学生に対する日本文学教育の場面で、専門的に日本文学を学んだ研究者が、日本文学全体に対する視野

を欠きがちであったり、新しい日本文学の動向に対して即応できなかったりするということが起こっている。これに対して、日本人研究者の側より、日本の研究者においても、日本文学教授法の理論的検討が必要であるという発言がなされた。

各国において、それぞれに状況は異なるものの、大筋において以上のような問題が共有されていることが明らかになった。それと同時に、各国の日本文学研究者の抱える問題が、単に外国における日本文学研究の問題にとどまるのではなく、日本の日本文学研究者の研究のあり方や方法とも本質的に関わる問題として議論されるべきであることも、今回のラウンド・テーブルを通じて明らかになったと言えよう。

以下、各国の研究者の報告の要点を簡略に記す。(発言順)

李栄九(イ・ヨング)氏〔韓国〕

韓国では、日本文学の研究は大学の中で進められている。外国の日本文学研究者として今直面している問題は、日本の国文学の文献実証主義的研究方法によって日本文学を学ぶことは外国人には限界があり、むしろ外からの新鮮な目で日文学全体をとらえることが重要となってきたことと、その全体的視野と実証的方法を調和させることが困難であることである。また、日文学研究を一地域研究としてではなく、文学の普遍性世界性を研究する学問としていく必要がある。日本に留学する学生にも専門に閉じこもるのではなく広い視野を持つことが強く望まれる。

ジャンージャック・オリガス(Jean-Jacques Origas)氏〔フランス〕

国際関係が厳しい方向へ変化しているにもかかわらず、フランスでは日本に対して極めて高い関心が持たれている。フランスの大学での日本語学習者の数は激増している。翻訳は、従来翻訳のない作家の作品の訳出、継続的な翻訳の出現、芭蕉七部集の全訳をみるなど、活発である。研究では、初めての日本文

学に関する論文集や、日本研究の雑誌が刊行された。しかし、日本文学だけの学術雑誌を刊行することはいまだ困難であり、また大学院で日本文学を学ぶ学生数も少数で、学生が日本文学を学ぶことには一つの決断を要する状況にあり、日本文学研究の現状は楽観を許せない。

金麗湖（キム・レーホ）氏〔ロシア〕

ロシアでは、ペレストロイカにともなう、政治から人間へという価値観の変化により、人文科学、日本学が再評価されている。日本文学研究においては、日本文学の総合的研究や、19～20世紀の世界文学の発展の中での日本文学の位置付け、ロシア文学との比較文学的研究に強い関心が持たれている。日本文学の翻訳は、日露戦争後の日本のロシア文学に対する関心に匹敵するような活況を呈している。但し評価の定まらぬ、極く最近の80年代の日本文学をどう紹介するかという課題も抱えている。今まで評価されなかった夏目漱石の翻訳、宗教と文学の研究が現在自分のテーマである。

イルメラ・日地谷・キルシュネライト（Irmela 日地谷 Kirschneireit）氏〔ドイツ〕

ドイツ語圏では、古典から現代までのシリーズの翻訳が刊行されるなど、翻訳は盛んである。日本に対する社会的関心は高く、今まで研究者の枠内に止まりがちであった日本学者が、日本の文化・文学を社会に対して紹介する場面が増えてきている。ドイツの日本学は、文学学が中心で、研究者の数も決して多くない（日本文学研究は、日本学の一分野）。規模が小さいために、かえって日本学内での議論が成り立ちにくくそれぞれの専門分野に閉じこもりがちである。ドイツの日本文学研究者は、ドイツの学問に対する立場、日本の日本研究に対する立場、教育者としての立場をいかにとるかという問題を抱えている。

ヴォルフガング・シャモニ (Wolfgang Schamoni) 氏〔ドイツ〕

ドイツでは、日本に対する社会的関心が高い。しかし、社会や学生の日本学研究者に対する強い期待と、文献学中心の日本学研究者の内発的な問題関心との間にはずれがある。日本学の一分野としてのドイツの日本文学研究は、方法的に高い水準にあるドイツのドイツ文学研究やフランス文学研究との話し合いの場が少なく孤立的になりがちであるが、同時に日本全体を視野に入れるとともに、ドイツ文学研究の陥り易い危険を回避する可能性をも持っている。日本文学研究の成果を、ドイツの中での研究として、いかにドイツ社会に還元するか、具体的には啓蒙とドイツの文学研究者との知的交流とをどう進めていくかが現在の課題である。

ウィリアム・ジェファースン・タイラー (William Jefferson Tyler) 氏〔アメリカ〕

アメリカの日本文学研究は、50年代の草創期の研究者から、30年代から60年代生まれの研究者へと世代交替が進むとともに、確実な定着をみせている。また80年代に大学での日本語学習者が急増し、それに伴い、文学研究の地位も相対的に向上する一方、研究者は、学問と、応用的な日本語教育とのバランスをとることが必要となった。研究方法については、90年代には、80年代の学問のあり方についての激しい議論に端を発する理論の台頭と、従来の作家論的研究との間の調整が行われつつある。これからの新しい研究方向としては、学際的研究、翻訳の理論的再評価、新しい日本文学像の構築などが挙げられる。

ジョン・ウィットティア・トリート (John Whittier Treat) 氏〔アメリカ〕

アメリカでは、学生の関心は経済大国としての日本にあり、日本文学への関心が高まっているとは言い難い。最近の日本文学研究は、従来の作家・作品論からフランスの批評理論を取り入れたものとなっているが、日本文学そのものの理解というより、西洋理論の例証として日本文学を扱うという傾向が強い。

また他の分野の研究者と協力しての日本文化研究も成果を挙げている。翻訳は、最新の俵万智・山田詠美・吉本ばななは直ちに訳されるのに対し、高橋和巳・野間宏・中上健次などの文学はほとんど訳されず、戦後の日本文学は“子供の国”の印象を与えかねない状況にある。評論の翻訳もわずかである。

ミコワイ・メラノヴィチ (Mikołaj Melanowicz) 氏〔ポーランド〕

ポーランドは、社会主義から新資本主義への過渡期にあり、学問と教育は、特に財政的に厳しい状況にある。日本文学研究にあつては、経済基盤の整備が急務であつて、とりわけ日本との協力関係をつくることが課題である。大学で日本語を学ぶ学生数は増加しており、質的にも向上しており、国際的な援助も受けている。しかし、研究と翻訳の出版に関しては、きわめて厳しい状況にある。日本の友人からの積極的な援助によって、日本研究の論文発表の場を作る動きもある。また、学際的な研究も試みられている。

尹相仁 (ユン・サンイン) 氏〔韓国〕

韓国では、村上春樹・吉本ばななの作品が作家や文学者によって紹介され、多くの若い読者に読まれて、韓国の文学界に大きな論争を巻き起こすという今までにない現象が生じている。この新しい動きに対して、日本での日本文学研究方法を踏襲する日本文学研究者は、発言の準備が出来ていない。日本文学研究者は、今の感覚に合った今日の日本文学を紹介し論じられる機動力を持つことが必要である。また、日本文学研究者と他の分野の研究者の知的交換の場も少ない。文学研究にとどまらぬ文化研究、歴史学など他の日本研究（その成長にはまだ時間がかかろうが）との学際的研究が今後必要とされる。

また、以上の報告に対して日本の研究者からは次のような発言があつた。

西洋の文学理論を日本文学に適用するというのではなく、外国文学にも適用しうのような文学理論を日本文学から生み出すことが必要である。(芳賀徹氏)

日本にも文学理論はあるのだが、それがあまり注目されず、西洋の文学理論を用いると“理論的”に見えるというところに問題がある。(平岡敏夫氏)

現在、日本学術会議で、日本の学術上の経済的な国際貢献が議論されているが、今回の各国からの報告は、その方向を考える上で大変参考になった。(山下宏明氏)

文学自体を論じられる場としての、国際日本文学研究集会を今後も良い方向に伸ばしていきたい。外国で広く日本文学を教えることになる留学生の受入れの日本側での整備が望まれる。外国での日本文学研究についての詳しい文献案内の作成が期待される。(糸川光樹氏)

日本文学教授法の理論的解決が必要である。専門的研究が必ずしも視野の狭さにつながるとは限らない。むしろ深さのある専門的研究がかえって広い視野をもたらす。また、日本文学研究は、日本文化研究には解消し得ない。(福田秀一氏)

その一方で、広い視野を持つことが、専門的研究に深さを与えるとも言える。また外国で日本を研究する場合、日本文化に対する広い視野は不可欠である。(芳賀徹氏)

日本の学会で評価されるような高い水準の発表が、国際日本文学研究集会でなされた。また従来では持ちにくい、例えば、近世と近代にまたがる「近代化」についての研究の場を国際日本文学研究集会で持てたことを評価したい。(本田康雄氏)

参加者名簿

List of Participants

(氏 名)	(現職名又は所属機関)	(専 攻)
ABDURACHMAN, Adi Sudijono	九州国際大学客員教授 インドネシア大学教員	日本近代文学・比較文学
相田 満	国文学研究資料館助手	和漢比較文学
新井栄蔵	国文学研究資料館教授	古今和歌集・古今伝授
AUBRON, Alexandre	早稲田大学	自然主義
AUESTAD 安倍玲子	オスロ大学研究員	日本文学
BESSON, Genevieve	INALCO	近代文学
BRANDES, Dorothea	埼玉大学留学生	古典文学
BURK, Stefania	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	日本近代文学
崔 京 国	東京大学大学院博士課程	江戸戯作
CHRISTIANSEN, Amy	名古屋大学大学院生	現代日本女流文学
DE VOS, Patrick	東京大学	日本演劇
DINITTO, Rachel	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	日本近代文学
DODANE, Claire	愛知県立大学客員助教授	近代短歌・近代女流文学
DORSEY, James	法政大学留学生	日本近代文学・評論
榎本隆之	早稲田大学	
FIALA, Karel	福井県立大学教授 チェコ・スロバキア カレル大学教授	国語学
福田秀一	国際基督教大学教授	中世文学
古川清彦	国文学研究資料館名誉教授・聖徳大学	近代文学
GOSSMANN, Hilaria	ドイツ日本研究所研究員	日本文学
GUELBERG, Niels	ミュンヘン大学東亜学研究所	日本中古・中世文学・日本思想
芳賀 徹	国際日本文化研究センター教授	18・19世紀日本文化史
浜崎 浩	日本放送協会国際局ヨーロッパ・グループ	フランス文学
長谷川ベバリー	翻訳業	

畑中千晶	東京学芸大学学生	近世文学・比較文学
早川美由紀	小山工業高等専門学校講師	近代文学（泉鏡花）
林 正子	岐阜大学助教授	近代文学
林 勉	東洋大学教授	古代前期文学語学
日地谷-KIRSCHNEREIT, Irmela	ベルリン自由大学教授	日本近・現代文学・文学理論大衆文化
平岡敏夫	群馬県立女子大学長	近代文学
許 錫	名古屋大学客員研究員 木浦大学校副教授	近代小説
星野紘一郎	「文学」編集部	
本田康雄	国文学研究資料館教授	近世文学
飯島武久	山形大学教授	比較文学・近代文学
池田 功	明治大学講師	近代文学
井上グレッチェン	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	日本近代女流文学・現代文学
井上 優	早稲田大学大学院博士課程	近代文学
石井寛子		
亀井秀雄	北海道大学教授	近代文学
JASCHKE, Renate	ドイツ日本研究所研究生	日本文学・近代文学
JOHNSON, Jeffrey	慶応大学	近世文学
鄭 海 東	東京学芸大学大学院生	近世文学
KOESSEL, Martin	日本研究センター	日本文学
加野彩子	コーネル大学大学院生	近代文学・演劇
鹿野政直	早稲田大学教授	近現代史
渦沼誠二	北海道教育大学教授	近世・近代文学
KIM, Le Kho	国際日本文化研究センター客員教授 ロシア科学アカデミー世界文学研究所教授	日本文学・比較文学
金 敬 姫	東京大学大学院博士課程	中古日本説話文学(他界観)
木山登茂子	国際交流基金日本語国際センター専門員	近代文学・日本語教育
小林弘子	シドニー大学	中世文学
小林和子	茨城女子短期大学講師	近代文学

小池正胤	東京学芸大学教授	近世・近代初期文学
小西甚一	筑波大学名誉教授	比較文学
小山弘志	国文学研究資料館長	中世文学
糸川光樹	明治学院大学教授	上代文学
九里順子	宮城学院女子大学助教授	近代文学
栗田香子	ボモナ大学助教授	近代日本文学
李 濬 燮	東京大学大学院生	江戸戯作
李 栄 九	国際日本文化研究センター客員教授 韓国中央大学教授	日本古典文学（詩歌分野）
劉 岸 偉	札幌大学助教授	比較文学・比較文化
LOZERAND, Emmanuel	早稲田大学大学院研修生 フランス国立東洋言語文化研究所博士課程	鷗外の歴史小説と史伝
LUCKEN Michael	早稲田大学留学生	美術史
MACCREGOR, Hilary	スタンフォードセンター 横浜	
MASTRANGELO, Matilde	東京大学外国人教師	近代文学：森鷗外・日本の話芸
松田 存	二松学舎大学教授	劇文学（中世）
松木 博	大妻女子大学短期大学部助教授	近代文学
松本鶴雄		
松村雄二	国文学研究資料館教授	中世文学（和歌）
松野陽一	国文学研究資料館教授	中世・近世和歌文学
松尾靖秋	工学院大学名誉教授 チュービンゲン大学前客員教授	近世俳諧
MELANOWICZ, Mikolaj	国文学研究資料館客員教授 ワルシャワ大学教授	日本文学・谷崎潤一郎
南 明日香	早稲田大学	近代文学
宮下健三	宇都宮大学教授	ドイツ文学・日独比較文化
森 美可		国文学
六車正章	国文学研究資料館管理部長	
村井 紀	藤女子短期大学助教授	思想史
長島裕子		近代文学
内藤之和		

中川成美	同志社女子大学助教授	近代・現代文学
中島国彦	早稲田大学	近代文学
中島礼子	国士館短期大学教授	近代文学
中村諒一	日本文理大学	源氏物語
中村純子	国文学研究資料館員	古典文学
中村康夫	国文学研究資料館助教授	歴史物語
中里良二	共立女子短期大学	思想史
中山幸子	茨城県立取手第二高等学校教諭	源氏物語
荷宮紀子	金城学院大学学生	近世文学
小川靖彦	国文学研究資料館助手	上代文学
呉 皇 禪	明治大学大学院博士課程	日本近代文学
岡 雅彦	国文学研究資料館教授	近世文学
奥出 健	湘南短期大学助教授	現代文学
大矢マルグリット	埼玉大学外国人教師	
ORIGAS, Jean-Jacques	フランス東洋言語文化研究所教授	日本近代文学
朴 賛 基	二松学舎大学大学院	日本近世文学
朴 熙 泰	韓国外国語大学校教授	日本語学・日本語教育
朴 裕 河	早稲田大学大学院博士課程	日本近代文学
RAWAT, Mahua	東京外国語大学研究員 ネール大学助教授	日本近代文学
REICHERT, James	東京大学・ミシガン大学	日本現代文学
盧 翠 雲	天津外国語学院助教授	近世文学
佐野正人	山形女子短期大学講師	日韓比較文学・近代文学・アジア文学
佐々木孝浩	国文学研究資料館助手	中世和歌
佐々木 恵	同志社女子大学短期大学部	日本文学
佐々木恵子		
佐藤マサ子	日本大学	
SCHAMONI, Wolfgang	ハイデルベルク大学教授	日本近世・近代文学

詹 秀 娟	新潟大学講師	近代文学
柴口順一	北海道大学助手	近代文学
柴田依子	信州大学大学院研究生	比較文学
申 基 東	東北大学大学院	日本近代文学
慎 根 綽	東國大学校日本学研究所長	比較文化・比較文学
新藤協三	国文学研究資料館教授	平安朝和歌文学
白仁高志	国際文化会館 企画部	日本思想史・現代フランス思想
SMITS, Ivo	東京大学研究生 ライデン大学大学院博士課程	中古・中世・和漢比較文学
STEEN, Robert	コーネル大学	日本近代文学
鈴木 淳	国文学研究資料館助教授	近世和歌
蓼沼正美	苫小牧工業高等専門学校	近代文学
高木きよ子	青葉学園短期大学	宗教学
武井協三	国文学研究資料館助教授	近世演劇
田村嘉勝	横須賀市立横須賀高等学校教諭	近代文学
谷口 巖	愛知教育大学教授	近代文学・比較文化
立松喜久子	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	日本学
龍田 肇	千葉県保育専門学院講師	近代文学
TAUSTI, Terhi Christine	フィンランド大使館	現代文学
TREAT, John Whittier	ワシントン大学準教授	日本近代文学
TYLER, William Jefferson	オハイオ州立大学準教授	日本近代・現代文学
上田 孝	国際交流基金日本研究部長	
アンダーソン・ケネス	コーネル大学大学院生	明治文学・美術史
涌井 隆	名古屋大学講師	近代・現代詩・比較文学
渡辺育雄	県立大宮工業高等学校教諭	近代文学
WESTERHOVEN, James	弘前大学外国人教師	谷崎潤一郎
WINKELHOFEROVA, Vlasta	チェコ・スロバキア連邦共和国大使館	日本近・現代文学
WOHR, Ulrike	早稲田大学特別研修生	女性史・宗教

WOLFE, Alan	早稲田大学国際部参与	日本文学・比較文学
徐 送 迎	新潟大学留学生	中日比較文学（万葉集）
薬師川麻耶子		近世俳諧史・中古文学
山口 博	新潟大学教授	古代和歌・日中比較文学
山中光一	国文学研究資料館名誉教授	近代文学
山下宏明	名古屋大学教授	中世文学
山崎愛子	現代俳句協会員	俳句
尹 明 老	実践女子大学大学院博士課程	日本近代文学
尹 相 仁	漢陽大学校専任講師	日本近代文学・比較文学

平成4年度国際日本文学研究集会委員会委員（五十音順）

- 委員長 福田 秀一（国際基督教大学教授）
- 委員 アラン・ターニー（清泉女子大学教授）
- 委員 糸川 光樹（明治学院大学教授）
- 委員 芳賀 徹（国際日本文化研究センター教授）
- 委員 平岡 敏夫（群馬県立女子大学長）
- 委員 山下 宏明（名古屋大学教授）
- （館内）
- 委員 新井 栄蔵（研究情報部長）
- 委員 ミコワイ・メラノヴィチ（客員教授）
- 委員 武井 協三（情報資料室長）
- 委員 松野 陽一（文献資料部長）
- 委員 本田 康雄（整理閲覧部長）
- 委員 六車 正章（管理部長）